

## 【概要版】第13回野菜需給協議会

1 日時：平成23年7月15日（金） 14：00～16：00

2 場所：農畜産業振興機構 北館6階 大会議室

### 3 議事概要

(1) 東日本大震災以降の野菜の需給・価格等の状況等について

#### ア 春野菜の需給・価格の実績（資料1-1）

- ・ 春キャベツは、去年は天候不順による生育遅れのため、特に4月中・下旬の入荷量が極端に少なく価格が高騰したが、今年は生育が順調で、入荷量が昨年を大幅に上回ったこと、震災の影響により消費が冷え込んだことにより、前年より非常に安い水準で推移。
- ・ たまねぎは、北海道の2年連続の不作により貯蔵ものが小玉傾向で当初は入荷量が少なく推移したが、佐賀県・兵庫県産が昨年に比べて豊作であったために、4月下旬以降、卸売価格は前年を大幅に下回って推移。
- ・ 春だいこんは、生育不良で入荷量が少なかった前年と比べ、今年は順調な入荷となっており、価格も高かった前年を大幅に下回って推移。
- ・ 春夏にんじんは、4月中旬以降、徳島県産、続けて千葉県産が順調な出荷となったことから、5月下旬以降、価格は昨年を2割程度下回る水準で推移。
- ・ 春はくさいは、この時期の生産の多くを占める茨城県産の生育が順調で入荷量は概ね前年を上回って推移。需要の弱さもあって、価格は概ね前年を下回って推移。
- ・ 春レタスは、生育不良で入荷量が少なかった前年と異なり、茨城県・兵庫県産の入荷が順調であったことから、価格は高値であった前年を大幅に下回って推移。

#### イ 野菜需給協議会幹事会の概要（資料1-2）

- ・ 3月11日の東日本大震災及びその後の福島原発の事故の影響を受けて3月末の野菜需給協議会は持ち回りで開催したが、その後、被害状況や需給への影響がある程度判明し始めた4月26日に幹事会を急ぎよ開催。
- ・ (財)環境科学技術研究所特別顧問の大桃洋一郎氏による放射性物

質と野菜への影響についての講演を実施。

- ・ 各会員団体が放射性物質の野菜への影響等について正しい知識の普及や被災産地を中心とした国産野菜の消費拡大に取り組む旨の緊急アピールを取りまとめ。

## (2) 23年産夏秋野菜の需給・価格の見通しについて

### ア 今後の気象見通し

株式会社応用気象エンジニアリングより説明（資料2-3）

- ・ この夏の天気については、太平洋高気圧の勢力が弱く、気温は高めだが、去年のような猛暑は続かないと予想。
- ・ 注意点としては、東日本の太平洋側と西日本側は降水量が少ないことによるダムの渇水による水不足及び大気の状態が不安定で雷雨が多いことによる局地的な大雨による洪水や浸水、がけ崩れなどの気象災害の発生が心配。

### イ 夏秋野菜の生産・出荷の現況

全国農業協同組合連合会より説明（資料2-1）

- ・ 今年は、①作付面積はほぼ前年又は平年と変わらず、②一部の果菜類以外震災による影響はほとんどなし、③全般的に遅れ気味だった夏秋野菜の生育状況は、5～6月の天候に恵まれどの品目もある程度順調に生育。
- ・ 「夏秋キャベツ」は、作付面積は群馬・北海道で前年並み、長野で微増、生育状況は群馬・長野は順調、北海道も日照不足等で遅れたが、回復傾向、出荷開始時期は、群馬、長野が6月中旬、北海道は7月上旬となり、既に出荷が開始。
- ・ 「たまねぎ」は、作付面積は北海道で微減、佐賀で微増し、兵庫はやや減少、生育状況は北海道で雹害が発生し、調査中だがほぼ平年並みの見込みで、佐賀は平年並み、兵庫は大玉傾向、佐賀、兵庫は8月頃までの出荷、北海道が8月から出荷開始で、ここでうまく産地が切り換わるとの予想。
- ・ 「夏だいこん」は、作付面積は北海道で微減、青森で微増、岐阜は前年並み、生育状況はほぼ順調、出荷開始時期は北海道が6月中旬、青森、岐阜が7月上旬。
- ・ 「秋にんじん」は、作付面積は、北海道で微増、青森は近年にんじんの値段が高値で推移しているということもあり、ながいも等からの

転作があり若干増加、生育状況は順調。出荷開始時期は北海道が7月中旬、青森は6月下旬となり既に開始。

- ・ 「夏はくさい」は、作付面積は、長野、北海道、群馬ともに微減、生育状況は若干遅れていたが、適度な降雨もあり、回復基調で作柄も良好、出荷開始時期は長野が5月下旬、北海道が7月下旬、群馬は6月上旬。
- ・ 「夏秋レタス」は、作付面積は長野・茨城は前年並み、群馬は微増、生育状況は長野・群馬で一時曇天・降雨・低温の影響が心配されたが全体としては概ね順調、出荷開始時期は長野が6月中旬、群馬が4月中旬、茨城は9月中旬。
- ・ 「夏秋きゅうり」は、作付面積は群馬・埼玉が前年並み、福島等では震災の影響等で作付けができなかった地域もあり微減、岩手、北海道は微減。生育状況は群馬で1週間程度遅れていたが、ある程度回復、その他の産地も平年並みに追いつく見込み、出荷開始は群馬が6月、福島が6月下旬、埼玉が8月下旬、岩手が6月末、北海道が7月下旬。
- ・ 「夏秋トマト」は、作付面積は北海道・岐阜が微増、福島・茨城が震災の影響もあり減少、熊本は前年並み、生育状況は遅れていたものが回復基調となり順調な生育だが熊本は若干生育不良、出荷開始時期は、北海道・岐阜が6月上旬、福島が6月中旬、茨城が8月、熊本が6月中旬。

#### ウ 夏秋野菜の需給・価格の見通し

野菜需給・価格情報委員会に取りまとめた結果について同委員会座長である藤島委員より報告（資料2-1）

「夏秋キャベツ」について

- ・ 作付面積はほぼ前年同様。生育状況も順調。出荷量は少なかった前年をかなり上回り、平年をやや上回る見込み。
- ・ その結果として、加工・業務用需要が震災の影響を受けて弱含みであることから、価格は前年を下回る見込み。

「たまねぎ」について

- ・ 作付面積は全体として前年並み。生育状況は雹害等が一部地域で発生したが、現在は回復し比較的順調となる見込み。出荷量は前年をかなり上回り、また平年も上回る見込み。
- ・ その結果として、価格は前年を下回る見込み。

「夏だいこん」について

- ・ 作付面積はほぼ前年並み。生育状況も順調となる見込み。出荷量は

不作だった前年をかなり上回り、平年よりも多くなる見込み。

- ・ 夏場の需要が少ないにも関わらず、出荷が特に8～9月に集中してくると見込まれることから、価格は8～9月を中心に前年を下回って推移する見込み。

「秋にんじん」について

- ・ 作付面積は前年より増加する見込み。生育状況は現在比較的順調。出荷量は前年、平年ともかなり上回る見込み。
- ・ その結果として、出荷が集中する8月中旬以降の価格は前年を下回る見込み。

「夏はくさい」について

- ・ 作付面積は前年並み。生育状況は順調、または遅れているものが回復しつつある状況。
- ・ 夏場の需要が少ないことから、価格は前年を大幅に下回って推移する見込み。今後、計画的な生産を一層進めていくべき。

「夏秋レタス」について

- ・ 作付面積はほぼ前年並み。生育状況は概ね順調。出荷量は前年をやや上回る見込み。
- ・ 非加熱メニューによるサラダ需要があると思われるが、加工・業務用需要がそれほど伸びていないという状況から、価格は下落基調になる見込み。

「夏秋きゅうり」について

- ・ 作付面積は前年並み。生育状況も順調。出荷量は前年をやや上回るが、ほぼ前年並みの見込み。
- ・ 非加熱食材としての需要が期待されるが、価格は前年並みを維持する見込み。

「夏秋トマト」について

- ・ 作付面積は全体として前年並み。生育状況は一部遅れていたものが、現在は概ね回復。出荷量は不作だった前年、平年ともに上回る見込み。
- ・ 非加熱食材としての需要が期待されるが、価格は全般的に前年を下回る見込み。

「夏秋野菜等の全体の消費動向」について

『景気、天候などの要因による消費動向』

- ・ 景気が低迷しており、消費減退傾向にあるということが背景にある中、震災の影響で、外食需要が落ち込み、その回復が遅れている状況。

『震災、原発事故の影響による消費動向』について

- ・ 震災の影響は業種・業態によって異なっており、特に外食における消費減退傾向が強い状況。
- ・ 福島県等の野菜は、比較的需要が戻ってきたが、お茶からセシウムが検出されたことなどによって、今後は非常に不透明。
- ・ 安全性の問題から、学校給食などにおいて、お子さん方に「不安なものを食べさせたくない」という親御さんの意識が強いこともあり、特定の産地を避けるという傾向が強い状況。

#### 『野菜全体の販売状況』について

- ・ 節電やサマータイムの導入によってライフスタイルが変化しており、これらに対応することが今後必要で、その一つとして、惣菜、中食需要の伸びに注目していく必要。また、非加熱食材としての消費量の動向等について注視していく必要があるが、非加熱メニューにより消費量が増えるということはないので、若干数量が減少することには注意が必要。
- ・ 現在、小売店では、同じ品目について複数の産地を併売するという対応を実施。

## エ 会員からのコメント

### 【全国農業協同組合連合会】

- ・ 夏はくさいについては、過去に緊急需給調整が行われた経緯があったが、生産者に過去の状況を説明し、作付面積はやや減少。また、7月に出荷が集中する作型から8月に分散して遅らせることも実施。
- ・ 原発以降の風評被害については、小売店での生食用は回復してきたが、加工業務用はまだまとまった数量の発注がきていない状況であり、7～8月辺りでの販売が苦戦するのではとの懸念。

### 【全国消費者団体連絡会】

- ・ 節電が叫ばれている中で、消費が落ちているはくさいを夏でもおいしく食べられる調理方法についての情報を切望。

### 【消費科学連合会】

- ・ 放射性物質の土壌汚染によるごぼう、だいこんなど根菜類への影響を心配しているが、農林水産省からの話をきいて、そのような心配はないとのことだったので一安心。

### 【主婦連合会】

- ・ 被災地に行っている医師2名を招いて放射線に関する講演を開催したが、放射線について私達が「正しく怖がる」ことが大切であることを学習。

【全国地域婦人団体連絡協議会】

- ・ 今後供給が盛んになり、見通しも良さそうなので一安心。

【青果物健康推進協会】

- ・ はくさいは鍋に合うイメージが強いのであまり知られていないが、サラダ等食べ方はいろいろ存在。
- ・ はくさいは夏場にスーパーではなかなか売れないので小学校の給食や社員食堂などで使ってもらえれば大きな需要が確保可能。

(3) 被災産地復興支援のための野菜の消費拡大活動等について

ア 被災産地の被害の状況と現状について

福島県、宮城県の産地の被害及び復興状況について調査結果の報告  
(資料3-1)

(ア) 福島県すかがわ岩瀬地区

- ・ すかがわ岩瀬地区は、福島県のほぼ中央、郡山市の南に位置。出荷量は1万トンを超え、日本一の夏秋きゅうりの大産地。
- ・ 震災によりため池（藤沼ダム）の決壊したため鉄砲水が発生し、死者7名、行方不明者1名の犠牲者が発生。地震により通水パイプが各所で破損して田んぼに水が張れず、今年はコメの生産ができない地域が発生。取材先のJAすかがわ岩瀬の野菜部会長の谷津氏も、水が確保できないため、今年はコメの生産を断念して、きゅうり一本で勝負。
- ・ この地域唯一のきゅうり専用の選果場「きゅうりん館」の機能が停止、稼働できなくなった。6月15日によりやく調整が終わり、一部稼働。7月からはフル稼働。
- ・ 原発事故の影響により県が土壌の検査を行うため、土壌に手を触れてはいけない時期があり、きゅうりの定植が1週間～10日間遅延。
- ・ JAすかがわ岩瀬では、防虫ネットのなかでミツバチによる受粉で育てる栽培法により作られたきゅうりを「天王（てんのう）」という名で出荷。収穫時期となる6月末から9月末までの約100日間、毎日朝4時半から収穫作業を実施。
- ・ 現地では、きゅうりは出荷制限の対象品目にはなっていないが、福島産というだけで風評被害が起きるのではないかと大変心配しており、取材先の谷津氏も野菜部会長として各地の市場や実需者を巡回。学校給食の一部では、納品できないなど厳しい反応もあるが、「福島県産を応援したい」との声も存在。

- ・ 東北にはきゅうりの産地がたくさんあり、東北6県のJAが集まり、7月から「キュウリビズ〜おひとつどうぞ 東北のきゅうりで夏を涼しく〜」というキャンペーンを行い、きゅうりを積極的に販売。

#### (イ) 宮城県亶理地区

- ・ 亶理地区は、仙台から東南、太平洋岸沿いに位置し、山元町と亶理町の2町からなるいちご産地。東北の湘南と言われ、冬温暖で日照が多く海岸沿いは砂地の畑が広く平坦で、いちご生産に適した地域。いちごのまとまった産地としては北限。
- ・ 宮城県内のいちご出荷量の85%を占める東北一の大産地で、ハウス栽培は40年の歴史があり、生産技術も卓越。
- ・ 地震直後に17mを超える津波が黒い壁のように現地を襲い、4km内陸まで到達。まだ、周辺にがれきが散乱している状態。
- ・ 亶理地区のいちごの取組みは、復興のシンボルとして取り扱われ、新聞紙上でもたびたび紹介されているが、96haあった栽培面積が、20haでの生産の目途がようやく立ったところで、その先の目途は立っていないという厳しい状態。全体的な復興が進まない中で、いちご生産が容易に再開できているかのような報道に対するいらだちも調査で実感。
- ・ 選果場の中も津波によりヘドロで覆われた。現在ではボランティアの協力もあってヘドロは除去されたが、選果機は海水を浴びて壊れた状態。
- ・ こうした厳しい環境の中、クリスマスに出荷することを目標に、生産農家5人が共同で農協の水稲用育苗施設を借りて育苗作業中。水源は地下水だが、鉄分が酸化し茶色く濁ってしまうなど、かなり厳しい状況下で実施。
- ・ 亶理での栽培品種は、「とちおとめ」と宮城独自の品種「もういっこ」。栃木県や福島県からの協力もあり、目標とする20haの生産に必要な苗がようやく確保。
- ・ 取材先の土生氏のところでは、津波で周辺の施設・家屋が津波に流される中、50aあったハウスのうち残った30aで生産を再開しようと取組中。養液栽培を行っているが、ハウス内にも津波による海水が流れ込み、加温用の機器や養液装置などは海水を浴びすべて破壊。現在、平日は他県のJA職員、土日は一般のボランティアが復旧作業を支援。
- ・ 亶理は、福島県のすかがわ岩瀬とは事情が全く異なっており、家

を失い、生産基盤を失い、大変な状況の中、生きるため必死に頑張っている状況。

イ 野菜ソムリエの旬ナビゲーション「ベジシャス」について

(資料3-2)

- ・ 復興支援シリーズとして第6号で栃木のトマトを、今月第7号は福島のすかがわ岩瀬のきゅうりを紹介。
- ・ ベジシャスは、野菜需給協議会として発行。会員がイベント等で活用できるよう印刷物を準備。

ウ 各会員団体による野菜消費拡大に向けた取組みについて

(資料3-3)

【消費科学連合会】

- ・ 消費者大学にて講演「放射線の人体への影響」を開催。
- ・ 新聞「消費の道しるべ」にて放射線に関するQ&Aを掲載。
- ・ 放射線に関して「知らないことが怖い」との想いで勉強中。

【全国地域婦人団体連絡協議会】

- ・ 葛飾区での福島県塙町産野菜の即売会や現地での特産品購入ツアーを実施。
- ・ 放射線による野菜や子供、水への影響が心配。

【青果物健康推進協会】

- ・ 放射線及びその野菜等への影響についてセミナーを開催。
- ・ web上にコミュニティを創設し、「EAT FOR NIPPON」という標語を作って国産を食べようという運動を実施。

【ファイブ・ア・デイ協会】

- ・ 企業の協賛や米国大使館の協力を得て、宮城県女川町にて野菜サラダ、野菜スープの提供や健康診断、子供対象の食育教室等を実施。
- ・ 支援活動には一極集中、一過性、PR色が強いものが多いが、被災地側の要望に応じて、かつ被災地側が継続できるような形で教育する支援は非常に難しく時間の手間。支援として今後どのようなやり方が適切なのかが課題。

【全国中央市場青果卸売協会】

- ・ 全国各地の中央卸売市場で地元市民を対象として開催する「市場まつり」にて青果物消費拡大のためのPR活動を実施。
- ・ 会員の協力により被災地へ義援金を送付。
- ・ 市場休市日に被災地応援フェアを開催。

- ・ 出荷制限を受けた野菜を絶対市場外へ出さないことを使命として活動。

#### 【全国青果物商業協同組合連合会】

- ・ 被災地応援セールを組合員や各市場内、新宿駅等で実施。
- ・ 会員には取引先の学校給食担当から放射線量が規制値以下であることを示すバックデータを要求される事例も存在。
- ・ 農林水産省の2次補正予算により巡回用移動販売車を手当し、避難先に野菜を持っていくことを検討中。

#### 【全国農業協同組合連合会】

- ・ 最初は風評被害に対する支援活動が主であったが、今は農林水産省が実施している「食べて応援しよう」の活動のように、消費拡大・消費喚起を中心に取組みを実施。
- ・ 東北だけでなく日本全国の野菜が価格低迷した時期があり、今が食べて農家を支えていく時。

#### 【農林水産省】

- ・ 被災地及びその周辺地域で生産されている農林水産物・加工食品を積極的に消費することで被災地の復興を応援する、「食べて応援しよう」の取組をフードアクション・ニッポンと連携して実施。食品の即売会やセミナーなどを通じて幅広く皆様方からの応援を頂き、被災地を応援する取組みをこれからも積極的に実施。